

令和4年度 研修員個人研究 研究要約

令和4年度 長崎県教育センター研修員の研究主題・副主題及び研究概要は以下のとおりです。

所属	氏名	研究主題及び研究副主題	研究要約
情報化推進班	篠原 慎一	「児童生徒が学びに向かう力を発揮する授業設計の要点整理」 ～新しいツールを活用した授業構想の一提案を通して～	<p>令和2年度は、GIGAスクール構想の実現のため1人1台端末活用の授業等における活用の研究を行い「活用事例マニュアル」を作成した。令和3年度は、実践協力校の協力を得て研究を進め、端末を活用する教職員の不安等の軽減のための支援の在り方を明らかにすることができた。</p> <p>令和4年度は、過去2年間の実践を基に、「共有機能」に着眼した。学習者は誰とつながるのがよいか、教師はファイルをどのように用意すればよいか等、一連の設定について整理する必要があると考えた。そこで、教師の授業構想のヒントになり得る成果物の作成を目指し研究を行った。まず、個別最適な学びと協働的な学びの視点を整理し、学習者を取り巻く学習環境の調査を行った。次に、新しいツールを含めた学習環境の各側面を捉え直し、共有設定の工夫について順に整理した。</p> <p>本研究の成果として、学習者の学びに有効な共有機能について主な学習場面（活動）ごとに整理し、教員の授業構想の一助となる「授業設計確認シート」を作成した。</p>
	赤木 亮介	「対話的な学びの実現を目指した授業づくり」 ～1人1台端末を活用した生徒同士の対話の充実を通して～	<p>これまでの自身の授業実践を振り返ると、生徒が一部の生徒の考えに触れることにとどまり、対話を通して考えを広げ深める対話的な学びの実現に課題があることが見えてきた。この課題の解決のために、ICTのよさを生かし、対話を通して考えを広げ深める学習モデル案（指導案、デジタル教材）を作成した。</p> <p>大村市立桜が原中学校の協力のもと、協力教員とペアを組み、前述の学習モデル案を基に実践検証協力校の実態に合わせた学習モデルを作成した。そして、授業実践における協力教員の働きかけや生徒の学びの様子から、対話を通して考えを広げ深める対話的な学びが実現できたか検証を行った。</p> <p>研究からは、「自己の考えを広げ深めるための学びの流れ」を意識した授業を行うことや、教師が1人1台端末等を活用して生徒の考えを把握し、個に応じた手立てを講じることが対話的な学びの実現に有効であることが見えてきた。</p>
	船戸 賢太郎	「責任ある行動をとる力を自ら育む情報モラル教育の実現を目指した授業モデルの構築」 ～デジタル・シティズンシップ教育の視点を取り入れた実践事例の分析を通して～	<p>情報活用能力に含まれる情報モラルは、「情報社会で適切な活動を行うためのもとなる考え方や態度」と定義されている。1人1台端末が配備されたGIGAスクール構想において、学校における情報モラル教育の充実は必要不可欠であり、さらなる情報活用能力の向上が求められることになる。しかし、学校現場における情報モラル教育の実践では、危険性を伝え、機器の使用を抑制させる指導や一律的なルール作りを行うといった事例が多くみられ、自ら考えて活用するという指導が十分ではないと推察される。</p> <p>本研究では、デジタル・シティズンシップ教育の視点を取り入れた授業モデルを作成し、研修講座で提案を行った。提案後にアンケートを実施し、その結果から、研修講座受講者にデジタル・シティズンシップ教育の視点を取り入れた情報モラル教育について啓発することで、本県の情報モラル教育に携わる教員の一助となったと考える。</p>

令和4年度 研修員個人研究 研究要約

令和4年度 長崎県教育センター研修員の研究主題・副主題及び研究概要は以下のとおりです。

所属	氏名	研究主題及び研究副主題	研究要約
義務教育研修班	草野 奈津美	『『数学的な見方・考え方』を働かせ、資質・能力を育成する小学校算数科の授業づくり』 ～「筋道を立てて考えること」を重視した数学的活動の充実を通して～	本県においては、全国学力・学習状況調査結果から、既習事項を関連付けて問題を解決する「筋道を立てて考える力」が十分に身に付いていないことが分かった。よって、子供が問題に対して自ら「数学的な見方・考え方」を働かせ、筋道を立てて解決する「数学的に考える資質・能力」の育成を目指すべく、授業改善を試みた。 研究にあたっては、昨年度は一単位時間に子供がたどる「思考過程モデル」を作成し、各過程における促したい思考の具体を示した。本年度は自力解決までの過程に焦点をあて、「筋道を立てて考えること」を重視し、数学的活動の充実を図るための教師の働き掛けを明らかにした。さらに授業づくりの一助となる単元構想シートと授業構想シートを作成し、これを活用して授業実践による検証を行った。その結果、働き掛けの有効性が確かめられた。
	脇浜 貴広	「深い学びを実現し数学的な資質・能力を育成する中学校数学科の授業づくり」 ～関数領域における概念的な理解を促し、日常と数学を往還する活動を重視した単元構想を通して～	過去4年間の全国学力・学習状況調査の結果から、長崎県の数学には関数領域に課題があり、改善されていないことが分かった。また、学習指導要領解説では、「概念的な理解を行うこと」、「日常と数学の往還を行うこと」について、授業改善の必要性が示されている。 そこで、本研究では、「1次関数」の単元において、日常と数学を結び付けながら、表、式、グラフを用いて課題を解決し、自分の考えを述べるができるような手だてを組み、概念的な理解を促し、日常と数学を往還する活動を重視した授業を構想した。それを基に、検証授業を行い、生徒が深い学びを実現し、数学的に考える資質・能力の育成との関連性について検証を行った。
	富村 崇広	「科学的に探究するために必要な資質・能力の育成につなげる中学校理科の授業づくり」 ～「子供の姿」を想定した「探究の過程」の導入段階における指導に着目して～	教師が「探究の過程」の導入段階において、生徒の気付きや考えを引き出すことが、科学的に探究することにどのような影響を与えるのかを、授業における生徒の発言や記述を基に考察する。併せて、想定した「子供の姿」と授業における姿を比較することを通して、学習指導要領に例示された資質・能力の具体を明らかにする。これらをもって、科学的に探究するために必要な資質・能力の育成につなげる授業づくりについて知見を得るものとする。
	榎 憲悟	「中学校社会科としての『思考力、判断力、表現力等』の育成を目指した授業づくり」 ～「パフォーマンス課題」を取り入れ、子供の姿が見えるルーブリックの作成に焦点化した実践を通して～	本研究は、単元を貫く「パフォーマンス課題」と子供の学習改善を促す評価（ルーブリック）を位置付けた単元及び授業を構想することで、「思考力、判断力、表現力等」の育成を目指す授業の在り方を提案するものである。 研究にあたっては、先行研究を基に、「思考力、判断力、表現力等」の育成につながる「パフォーマンス課題」と「ルーブリック」の意義や有用性を整理した。その上で、地理的分野「日本の諸地域」の「中国・四国地方」において、「パフォーマンス課題」を設定し、その課題に対する「自分の考え」等を記入する「構造化シート」及びそれを評価する「ルーブリック」を含む「生徒用ワークシート」として具体化した。また、単元の学びの一体化を図るために、各授業の学びと「パフォーマンス課題」を結び付けた単元構想（全5時間）を示した。 研究を通じて、「思考力、判断力、表現力等」の捉えや授業実践の具体が明確になった。
	北島 千恵子	「自分自身の気持ちや考えを正確に書く力を育む中学校外国語科の授業づくり」 ～「話すこと」と「書くこと」の技能統合を意識した言語活動を通して～	中学校学習指導要領解説 外国語編では、小・中・高等学校で、学びの連続性を意識した指導が重要視されている。「書くこと」に注視すると、小学校の「書き写す」が中学校の「正確に書く」という目標に発展するが、長崎県学力調査の「書くこと」の領域の正答率は他の領域と比べ低く、生徒は苦手意識を感じており、「書くこと」に課題がある。 そこで本研究では、「書くこと」に焦点を当て、正確に書く力を身に付けるための言語活動として、技能統合型の言語活動の必要性と在り方を明確にした。 研究の成果として、正確に「書くこと」へ「話すこと」から段階的に技能統合を図る言語活動を取り入れた単元構想と、その構想に基づいた生徒自身の気付きを促すプランシートを作成した。併せて、生徒相互の学び合いから正確に「書くこと」を目指し、ピア・フィードバックに関する研究を進めその具体を考察した。

令和4年度 研修員個人研究 研究要約

令和4年度 長崎県教育センター研修員の研究主題・副主題及び研究は以下のとおりです。

所属	氏名	研究主題及び研究副主題	研究要約
義務教育研修班	立山 遥子	「自分の言葉で考えを語る生徒を育てる国語科の授業づくり」 ～「読むこと」における「言葉による見方・考え方」を働かせるための教師の働き掛けの工夫を通して～	全国学力・学習状況調査や長崎県学力調査の結果から、本県においては、「読むこと」の領域における「文章を理解し自分の考えをもって表現する問題」で、正答率が低く無答率が高いという課題があることがわかった。これは、生徒が文章を読んだり、自分の考えを表現したりする際に「言葉による見方・考え方」を十分に働かせることができず、文章を「正確に理解」「適切に表現」することができていないからではないかと考えた。 そこで本研究では、生徒が「言葉による見方・考え方」を働かせるとはどのようなことかを明らかにした上で、そのために教師がどのような働き掛けをしていくかを具体的に整理した。また、整理したものを基に「読むこと」の領域で授業を構想し、指導案を作成した。 今年度の研究の中心となった「考えるための技法」は、どのような場面で、どのような働き掛けを用いて、生徒が「言葉による見方・考え方」を働かせることにつなげるか、より具体的に授業を構想するためのツールとして有効であると検証できた。
	平田 咲希	「造形的な見方・考え方を働かせる中学校美術科の授業づくり」 ～〔共通事項〕を明確に位置付けた学習過程を通して～	学習指導要領改訂により〔共通事項〕は、造形的な視点を豊かにするために必要な「知識」として位置付けられた。しかし、先行研究においては、「その指導は、確立されておらず、標準的な指導の方法の確立が求められている。」という現状が指摘されている。自身の指導を振り返ってみても、〔共通事項〕で示されている項目を各題材でどう取り扱うか明確に意識できておらず、手立てが不十分であった。 そこで本研究では、〔共通事項〕を明確に位置付けた年間指導計画を作成し、〔共通事項〕の実感的な理解を促す題材展開の在り方を構造化することで、指導の具現化につなげた。
	吉野 美穂	『「差別に気づき、差別を許さず、差別をなくそうとする実践行動の育成』を目指す学習の提案」 ～小学校段階における学習プログラムの作成を通して～	「差別の現実深く学ぶ」という人権・同和教育の基本姿勢を踏まえ、不適正採用選考の根絶に向けた様々な取組が続けられてきた。全ての子供の進路保障を実現するためには、差別に気づき、差別を許さず、差別をなくそうとする力、なかまとともに未来を切り拓いていく力の獲得を目指した人権・部落問題学習を継続的・計画的に行う必要がある。 そこで、本研究では不適正採用選考をはじめとする進路保障に関わる差別の現状や課題の整理、第三次とりまとめに示されている三つの側面から小学校段階における学習プログラムを作成した。 本研究を通して継続的・系統的な学習の実施により、教職員の知的理解と人権感覚の向上と実践行動が促進され、児童生徒が差別に気づき、差別を許さず、差別をなくそうとする実践行動につながることを目指す。
	長瀬 陽一	『「各学年、学校で自信をもって取り組める部落問題学習の系統的なカリキュラム」の提案」 ～地域教材を含めた既存教材の効果的な配列による実践の広がりに向けた試み～	情報化社会の進展に伴う部落差別の状況の変化等から、各学校段階において部落問題について正しく学ぶ必要性が益々高まっている。一方で、県内では部落差別解消を目指す取組がなかなか広まらない現状もある。そこで、部落差別解消につながる実践行動を目標とすることにより、各学校段階に応じた学習内容を提案することが有益ではないかと考えた。 研究の出発点として、自身の実践である地域教材を取り上げた例を基に、その成果や課題、系統性の検証を行った。そして、様々な教材や学習内容を配列した系統的な学習内容の例示として、「人権教育の指導方法等の在り方について（第三次とりまとめ）」を参考にしたイメージ図を試案したことが成果である。さらに、課題の整理と次年度へ向かう研究の方向性について検証した。

令和4年度 研修員個人研究 研究要約

令和4年度 長崎県教育センター研修員の研究主題・副主題及び研究概要は以下のとおりです。

所属	氏名	研究主題及び研究副主題	研究要約
高校教育研修班	中村 美加	「化学を学ぶ意義や有用性を実感できる化学基礎の授業づくり」 ～身近な物質で起こりうる化学反応を題材とした学習指導案の提案を通して～	平成27年度実施高等学校学習指導要領実施状況調査や2015年実施PISA調査などの結果から、化学を学ぶ意義や有用性の実感に関する生徒の実態と教師の認識が乖離している状況が見えてきた。この乖離は、化学と日常生活や社会との関連を図る授業で行われている学習活動が、単に教師が生徒に知識を教授するだけのものになっていることが原因だと考えられる。自身の指導を振り返っても、身の回りの物質や現象について、知識の伝達为中心で日常生活の中から十分に疑問を引き出したり探究的な取組をさせたりしてきたとは言えない。 本研究では、化学を学ぶ意義や有用性を実感できる授業を目指して、身近な物質によって起こりうる化学反応を題材に、「酸化と還元」の単元における全8時間の学習指導案を作成し、授業モデルを示した。これを長崎県内の高等学校理科教諭に提案して意見を求めた結果、「化学を学ぶ意義や有用性」の実感へと繋がる「学習内容と日常生活との関連」を図る授業であることを確認した。
	辻 綾子	『伝え合う力』を育成する高等学校国語科の授業づくり ～「話すこと・聞くこと」の学習活動における指導と評価の一体化を通して～	高校国語の課題のひとつに、平成28年12月の中央教育審議会答申で取り上げられた「話し合いや論述などの『話すこと・聞くこと』『書くこと』の領域の学習が十分に行われていないこと」がある。昨年度実施した、長崎県の高校国語教師の意識調査からも『話すこと・聞くこと』の指導の必要性は感じているが、評価の難しさなどの理由で取り組めていない」という実態が明らかになった。 本研究では、昨年度作成した年間指導・評価計画を基に「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点をどのように評価するかに焦点を当てた授業を計画した。具体的な評価の場面、評価材料等を記載した学習指導案を作成し、授業により検証した結果、評価に関して県内の国語科教員の一助となる成果を得るとともに、「話すこと・聞くこと」の学習活動を通して「伝え合う力」を育成する授業の一例を示すことができた。
	澁谷 理絵	「物事を多面的・多角的に捉える力の育成を目指した数学科の授業づくり」 ～高等学校数学における教科等横断的な学びを通して～	平成28年12月の中央教育審議会答申において、高等学校における教育が、小・中学校に比べ知識伝達型の授業にとどまりがちであることや、卒業後の学習や社会生活に必要な力の育成につながっていないことが指摘されている。生徒は高校卒業後、非連続的と言えらるほど急激に変化する社会に出て、様々な課題に直面する。だからこそ各教科の学びをつなぐことで、幅広い知識や技能・技術を用いながら、物事を多面的・多角的に捉える力を養い、現代的な諸課題に対応する資質・能力を身に付けることが必要なのではないかと考える。 本研究では、教科等横断的な学びについての情報を収集・整理し、それをもとに他教科と数学とを組み合わせた教科等横断型の学習指導案を作成し、一つの事例として提案する。教科等横断的な学びを通して、物事を多面的・多角的に捉える力の育成を目指したい。
	中野 尚子	「高校化学における主体的・対話的で深い学びを実現するための授業づくり」 ～探究の過程を通じた学習活動における教師の問いかけからのアプローチ～	平成28年の中教審答申では、高等学校の授業に知識伝達型の傾向がみられることや、諸外国に比べて生徒が理科を学ぶ意義を感じられていないとの指摘があり、平成30年告示の学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」への授業改善が重要とされ、生徒が「どのように学ぶか」の視点に立った授業改善が求められている。長崎県公立高等学校理科教諭に対して実施したアンケートでは「主体的・対話的で深い学び」に向けた取り組みが見られる一方、「効果的な対話のための問いの難しさ」や「従来通りの教え方をしてしまう」、「準備の時間がない」などの実態があることがわかった。 本研究では、教師の「問い」を改善することで生徒が学び取る授業の実現につながると考え、教師の「問い」を示した単元計画と学習指導案を作成した。その結果、「本質的な問い」や「単元を貫く問い」を踏まえて「個別の問い」を練り直すことで、学習内容に対して様々なアプローチができることがわかった。

令和4年度 研修員個人研究 研究要約

令和4年度 長崎県教育センター研修員の研究主題・副主題及び研究概要は以下のとおりです。

所属	氏名	研究主題及び研究副主題	研究要約
特別支援教育研修班	向井 裕加	<p>「聴覚障害のある児童生徒が他者と共に尊重し合いながら協働して生活していく態度を育む指導の充実を目指して」 ～居住地校交流リーフレットの活用を通して～</p>	<p>ろう学校児童生徒が在学中に障害のない同世代の児童生徒と共に学習活動を行う機会の一つに居住地校交流がある。居住地校交流は、お互いを正しく理解し、共に助け合い、支え合って生きていくことの大切さを学ぶ良い機会ではあるが、ねらいを共有することや計画的、組織的に取り組むことが大切である。そこで昨年度は、居住地校交流の充実を目的に「居住地校交流リーフレット」（以下、「リーフレット」という。）を作成した。 今年度は、学校現場のニーズに合ったリーフレットとなるよう、居住地校交流担当教員等からの意見を集約し改編を行った。また、リーフレットの活用方法を提案し、居住地校交流の打ち合わせや実施の際に活用してもらうことで、居住地校交流のねらいが明確になり、計画的、組織的な居住地校交流を推進する一助となったかを検証した。</p>
	田中 早紀	<p>「個別の指導計画の作成・活用における特別支援学級担任と教科担任の連携の充実を目指して」 ～中学校に在籍する情緒障害のある生徒を対象とした「実態把握シート」の活用を通して～</p>	<p>中学校の情緒障害学級に在籍する生徒の中には、交流学級において授業を受ける機会が多い生徒がいる。特別な配慮を要する生徒については、生徒の障害の状態に応じた指導内容や指導方法の工夫を、生徒に関わる教師が計画的・組織的にすすめることが大切である。しかし日々の指導や支援について情報交換をする時間の確保が難しかったり、特別支援学級の担任が変わると、前年度までに行われていた指導や支援についての引継ぎがうまくいかなかったり、教師間の連携に課題が感じられた。 そこで、特別支援学級担任と教科担任が情緒障害のある生徒の状態像や学習上の困難さについて共通理解し、支援の在り方について整理するための「実態把握シート」を作成することとした。これを活用することで教師間の連携強化につながる個別の指導計画が作成できるだろうと考えた。</p>
	中山 彩	<p>「高等学校における特別な支援を要する生徒の進路実現を目指して」 ～フローチャートにより進路指導における校内支援体制の強化を図る～</p>	<p>特別支援教育を巡る状況の変化を踏まえ、校内支援体制整備の重要性が指摘されている。高等学校は社会への出口の場であることから、進路指導における校内支援体制の構築が特に重要だと考える。そのためには、特別支援教育コーディネーターや進路指導部、担任等それぞれの立場で行ってきた進路指導を可視化したフローチャートを作成し、職員が進路指導の全体像を把握することが有効だと考えた。 そこで、本研究では「高等学校における特別支援教育ガイドブック～実践研究編～」（長崎県教育委員会 2015）に掲載されている「支援が必要な生徒への『就労支援』フローチャート」をもとに、実践検証校において聞き取り調査を行い「特別な支援を要する生徒の進路指導フローチャート」を作成した。フローチャートを活用し、教職員間の共通理解を図ることで、特別な支援を要する生徒の進路実現のための校内支援体制強化の一助となると考える。</p>

令和4年度 研修員個人研究 研究要約

令和4年度 長崎県教育センター研修員の研究主題・副主題及び研究要約は以下のとおりです。

所属	氏名	研究主題及び研究副主題	研究概要
教育相談班	田中 淑香	「児童が考え、議論する小学校道徳科の授業づくり」 ～「道徳科授業づくりシート」の提案と活用を通して～	本研究では、1年次において、考え、議論する道徳科の授業を支える要素を整理した。また、整理した内容と、小学校教員の道徳科に対する意識調査の結果をもとに、毎時間の道徳科の授業づくりの一助となるであろう「道徳科授業づくりシート」(A3版用紙1枚)を作成した。 2年次である今年度は、「道徳科授業づくりシート」の有効性を確かめるため、実践検証協力校における実践検証を行った。また、実践検証の結果を踏まえ、より効果的で多くの教員が日々活用できるものへと「道徳科授業づくりシート」の改編を行った。加えて、道徳科の授業づくりをサポートする「道徳科授業づくりハンドブック」(A4版用紙34ページ)も作成した。これらのことが、県内の小学校教員の道徳科の授業づくりにおける授業構想力の向上につながるかと考え、研究主題を設定した。
	服部 雅子	生徒指導と教育相談が一体となった支援を目指して」 ～「生徒指導・教育相談連携ガイド」の作成を通して～	児童生徒を取り巻く環境の変化の中で、児童生徒の発達や問題行動が多様化し、深刻化している。特に不登校児童生徒は年々増加の一途をたどり、不登校に陥っている原因を本人さえもわかっていないことがある。不登校といってもその原因や背景は多岐にわたり、複雑に絡み合っている場合もあるため、学校の生徒指導と教育相談においては、課題を抱える児童生徒に関する共通理解を図り、組織的な対応を行うことが求められている。このような現状から、高等学校における多様な生徒の早期対応や校内支援を行うために、生徒指導と教育相談を一体とする視点から不登校生徒のアセスメントを連携して行うツールを考え、「生徒指導・教育相談連携ガイド」を作成するために基礎研究を文献等で行うこととした。
	村松 玲子	生徒が自己理解を深め、他者とよりよく関わる力を身に付けるための支援の充実 ～「SEL」と「ピア・サポート」を取り入れた教育活動の実践を通して～	近年、社会や家庭におけるインターネットの普及や情報化といった社会の変化によって、子ども達が人と直接関わる機会や幅広い年齢層と関わる機会が減ったことにより、子どもが対人関係を学ぶ機会が減少している。 自分自身の教職経験からも、生徒が自分のよさを実感し、他者とよりよい人間関係を築いていくことができるように、学校教育において、それらの力を身に付けられるような支援を具体的にを行う必要があると感じている。 本研究では、学校教育における具体的な手立てとして、心理教育プログラムである「SEL」と「ピア・サポート」を取り入れた生徒指導のプログラム案と教育活動案を作成することで、生徒が自己理解を深め、他者とよりよく関わるための力を育成することを目指す。

詳しい内容をお知りになりたい方は、研修員個人研究報告書が玖島の杜図書館資料室(本館3階)にありますので、是非御覧ください。